

# 「小さきものたち」を拾い集めること

## 映画図書館員会議2019に参加して

### 紙屋牧子

Makiko Kamiya

映画芸術科学アカデミーが、映画資料専門の図書館員、アーキビスト、キュレーター、研究者たちの議論の場として、初めての大規模かつ画期的な会議Film Librarians Conference (以下、図書館員会議)を開催したのは2017年4月のことであるが<sup>1</sup>、その成功を受け、「DOCUMENTING CINEMA (映画の文書化)」という前回同様の旗印を掲げて「映画図書館員会議2019」が5月15日から17日にかけて開催された。再びメイン会場となったピックフォード研究センターのリンウッド・ダン劇場は、前回の140名を上回る250名の参加者の熱気に包まれ、脚本家のラリー・カラゼウスキーの基調講演をオープニングに初日を迎えた。

南カリフォルニア大学(USC)のルームメイトだったというスコット・アレクサンダーとの共同作業による、『エド・ウッド』(ティム・バートン監督、1994年)や『ラリー・フリント』(ミロス・フォアマン監督、1996年)、『ビッグ・アイズ』(ティム・バートン監督、2014年)といった伝記映画の脚本家として知られるカラゼウスキーであるが、USC在学中に学生寮の隣のUSC図書館に足繁く通ったこと、そこでは、ビリー・ワイルダーやバーバラ・スタンウィックといった名前を用紙に書いて司書に渡すだけで、5分後にはその特別コレクションが目の前に置かれるのだということ、そして何よりも伝記映画の脚本を書くために如何

に図書館という存在が不可欠であるかを熱弁した。また彼は、本来なら伝記を書くに値しないかもしれない人物にむしろ関心があり、その結果、いわゆる、「ブラックスプロイテーション映画」(アフリカ系アメリカ人をターゲットにした映画)の生みの親を描いた伝記映画『ルディ・レイ・ムーア』(クレイグ・ブリューワー監督、2019年)の脚本を書いたのだと明かした。

2日間でセッション1から11までのフォーラムが開かれたが、全体を通して重要なテーマとなったのは、コレクションのデジタル化とその活用・公開に関する諸問題だった。あるフォーラムでは、メアリー・ヒュエルズベック氏(ウィスコンシン映画演劇研究センター/アシスタント・ディレクター)が、1960年代にウィスコンシン大学に寄贈された音声資料(テレビドラマ「トワイライト・ゾーン」の脚本家として知られるロッド・サーリング旧蔵)1000点以上のデジタル化に関する報告をおこない、Dictaphone社が開発したDictabeltという既に劣化したアナログメディアからのデジタル変換の成功例が示された。一方その直後に登壇したステープ・ウィルソン氏(ハリー・ランサム・センター/キュレーター)の報告は、テキサス大学のハリー・ランサム・センターが所蔵している1920年代から1970年代の1万枚の映画ポスターのデジタル化と公開プロジェクトに関するものだったが、ソフト

ウェアがクラッシュしたことによって、デジタル化の全てのプロセスを繰り返す羽目になったという彼の失敗談は、映画ポスターをはじめとする資料のデジタル化をここ数年間、継続しておこなっている当館にとっても震え上がるようなエピソードであった。

今回の会議では、初日を締め括るセッション「Lightning Round: Archives Spotlight」

において当館における資料デジタル化について話す機会も得られ、2017年度より当館が力を注いできた、ハイクオリティな複製ポスターの作製にスポットを当てて紹介したが、とくに、『コンチネンタル』(マーク・サンドリッチ監督、1934年)のケース——オリジナルのポスターでは紙が破れ欠損しているフレッド・アステアとジンジャー・ロジャースの顔の一部をデジタル技術によって復元した——は参加者から歓声も上がり好評だったようである。

アメリカ映画史の「修正」に、デジタルコンテンツとインターネットを活用する画期的な試みも大きな注目を浴びた。一つは、マリア・エレナ・デ・ラ・カレーラス氏らから紹介された、映画人たちの口述による記録をデータ化してオンライン上で公開していく映画芸術科学アカデミーによるプロジェクトであり、もう一つは、リー・ホイットントン氏(マーガレット・ヘリック図書館/テクニカル・サービス責任者)から紹介された、「AFI Catalog」(アメリカン・フィルム・インスティテュート運営のオンライン上のデータベース)に、これまでクレジットされてこなかった映画草創期からの女性映画人のパイオニアたちの名前を反映させていくというプロジェクトである。後者は、AFIが2019年から開始した“Women They Talk About「噂の女たち」”(1928年のロイド・ベークン監督作『評判女候補者』の原題)と名付けられた、映画業界のジェンダー・バランスの問題に取り組んだプロジェクトの一環である。いま会議を振り返ってみて浮かび上がってきたのは、これまでその功績が記述されてこなかった女性やマイノリティ、ヴァナキュラーなもの——周縁に置かれた「小さきものたち」——が発するnarrative(小さな物語=小文字の歴史)によるHistory(大きな物語=大文字の歴史)の書き換え、ということである。この試みが目指すものは、「小さきものたち」を根気よく拾い集めてゆく仕事にほかならないノンフィルム資料のアーカイビングの本性と重なる。この分野の成熟期はまだこれからである。映画図書館員会議2021の開催を待望する。 【..】

(国立映画アーカイブ特定研究員)

註

1 前回の図書館員会議については、岡田秀則「フィルムアーカイブの諸問題 第97回: もはや「ノンフィルム」ではない—映画図書館員会議に参加して」『NFCニューズレター』第132号(2017年7-9月号)、14頁を参照のこと。



ピックフォード研究センターのリンウッド・ダン劇場にて